

南半球便り（その 68）：駆け巡る馬たち

4 月 8 日

得がたい経験をしました。シドニー近郊の牧場に招待され、競走馬の育成のあり方を見てきたのです。そして、日豪を結ぶ絆が人の交流にとどまらず、馬の交流にも及ぶことを実感してきました。

1. ワーウィック・ファーム

訪れたのは、シドニー西の郊外に所在する有名なワーウィック・ファーム。豪州着任後、主要紙を読むたびにスポーツ欄の数ページを競馬関連情報が占めるだけでなく、乗馬が生活に根付いている有様を見てきました。



シドニー西の郊外にあるワーウィック・ファーム

スポーツ新聞を丸めて抱え、赤鉛筆を耳に挟んだ競馬ファンのイメージとは異なり、有名なメルボルン・カップを始め、競馬が社交の場として定着してきた豪州です。私も、いざというときに備えてモーニングを持参しただけでなく、一度はそうした競走馬を育て、売買する現場をみたいと思っていたところ、その機会に恵まれたのです。

東京ドームの2倍はあるという広大な敷地。4月3日（日）に関係者400名あまりが参加した盛大な昼食会が行われ、その後2日間で、手塩にかけて育てられた460頭もの1歳馬が競りにかけられるとのことでした。



東京ドームの2倍はあるという広大な敷地にあるレーストラック

2. 日本とのつながり

間近で見た馬たちの何と美しいこと！贅肉無く引き締まった躍動する筋肉、磨き抜かれた毛並み、限りなく優しい眼差し。良質な馬は30万ドルから40万ドル、場合によっては100万ドル（日本円で約9000万円）の値がつくと聞いて、合点がいきました。



嬉しかったのは、今回の競りに出される馬の中には、日本由来の馬が 20 頭ほどいる由。北海道の「ノーザン・ファーム」からです。同ファームの吉田勝己社長とは、知人の紹介で豪州赴任前にお会いした経緯があるので、今回の競りに日本から駆けつけた同社関係者の方々と話に花が咲きました。

豪州の業界関係者によれば、昔は豪州の馬は豪州産が大半であったものの、最近では、米国、欧州、日本等からも輸入されつつある由。日本の馬は、豪州産に比べて体格がやや小ぶりなものの、良質で注目されているとのことでした。昼食会前日に行われたレースでも日本馬が優勝した程の活躍ぶりです。

3. 悩み

業界にとって一番の悩みは、アニマル・ウェルフェアに熱心な運動家による抗議への対応とのことでした。日本では余り耳にしません、豪州では、馬をむち打つこと、小さな厩舎に入れること、若い年齢からレースに出すことなどに対して、運動家から強い抗議が寄せられている模様です。

このような話を聞いた時、背景と置かれた状況は全く異なりますが、前職の外務省経済局長時代に捕鯨問題に取り組んでいた際に、「知性に富んだ荘厳で可愛い鯨を何故殺すのか。」との執拗な抗議を受けたことを想起しました。

救いは、日本から来た馬は豪州の気候や環境に慣れ、伸び伸びと育っているとの話でし

た。実際に厩舎も見て回りましたが、実に大事にケアを施されていました。早朝から緑滴るレーストラックを悠々と疾走している様は、得も言えぬほど美しく、壮観な光景でした。

4. 特別ゲスト

何故このような機会に日本大使が招待を受けたのか、訝しく思われる人もいるかもしれませんが。1867 年以来 5 世代にわたって競走馬を育ててきたイングリス (Inglis) 家の 5 代目のアーサーとシャーロットの夫妻が招待してくれたからです。シャーロットは、JET プログラムで滞日した OG でもあります。



イングリス夫妻

もとは、昨年イングリス夫妻を私が招待して大使公邸に来てもらいました。これは、長年の付き合いのマニュエルとスザンヌ・パナジオトポロス夫妻の紹介によるもの。キャンベラの大使公邸の天ぷらカウンターで揃って日本食を満喫したことへの答礼という次第です。



くだんの昼食会には、旧知のジョン・コーツ豪州オリンピック委員会会長夫妻を始めとして錚々たる名士の方々もお越しになっており、ご挨拶できました。

個人同士の付き合いでもそうですが、外交の世界でも、点と点をつないでいくと、やがてそれが線になり、さらには面に広がっていくことを体感する瞬間があります。そんな思いに包まれながら、魅力あふれるファームを後にしました。あの駿馬たちにいずれの日か再会するのが楽しみです。

山上信吾